

パリの小説家バルザック  
- 『ヴァン・クロール』の舞台 -

澤田 肇



セーヌ川右岸のマレー地区は現在のパリ4区の東端にある。この地区の基点であるメトロの駅サン＝ポールからほど遠くないところにピカソ美術館が設置されたり、バスチユ広場に面して新オペラ座が建設されて以来、眼を楽しませる多くのブティックや画廊、カフェが次々と開かれ、今日のパリでもっとも人気のある観光スポットの一つとなっている。その中心に位置するのがヴォージュ広場である。

広場は正方形になっており、それに面して、アーケードの回廊をもち、煉瓦と白い切石の外壁が対照的に交錯する三十六棟の館が建ち並んでいる。その中の一つはヴィクトール・ユゴー美術館になっているが、落ち着いた美しいたたずまいを見せる場所である。1605年アンリ四世によって造営が始められ、1613年次の国王ルイ十三世の時に完成したヴォージュ広場は、長らくロワイヤル広場と呼ばれることになる。それまでパリには規模の大きな広場がなかったので、優雅な散策地として社交界の人士を引

き寄せた。また広場の周辺には貴族の住む館も数多く建てられ、十七世紀のマレー地区は高級でありかつ人の往来も盛んな地区だった。

しかしこの威光も、十七世紀末には終わりを迎える。遊歩を楽しむ場所としては、ルーヴル宮の北にあるパレ＝ロワイヤルの庭園が公衆に開放されて一躍流行の先端地となる。また同じ時期に、宮殿に行くのに便利なロワイヤル橋が完成すると、セーヌ左岸のサン＝ジェルマン街では貴族の豪壮な邸宅が続々と誕生する。この街はパリの最高級地区としての令名が高まり、神話的存在にまでなるのである。

マレー地区の方は、深い眠りにつくかのように、徐々に寂れていく。街の主演は、貴族から富裕市民や官吏へ移り、さらに小市民、年金退職者あるいは商人へと変わる。だが庶民の活気あふれる地区というのではなく、何もかもから乗り遅れたような様相を呈する。沈黙と静寂の中に時間が止まり、外部の世界から隔絶されたかのような地区となるのである。ここでバルザックは、一八一四年から一八二四年までという青少年期の大半を過ごす。

この街が、小説『ヴァン・クロール』の主舞台の一つとなる。その作者バルザックは、われわれが生きる世界とは別のもう一つの世界が平行して存在していることを確信させてくれる、その美しさ、激しさ、真正さの奔流によってわれわれの世界にエネルギーをもたらしてくれる作品群『人間喜劇』を創り出すことになる。

一八一九年二十歳のバルザックは、両親の期待していた公証人になる道を捨てて、作家になるべく様々な習作に取りかかる。その成果として書物になったものが、一八二二年から二五年にかけて幾つかの仮名で出版された「青年期の小説」と呼ばれる一連の作品である。匿名で一八二五年に刊行された『ヴァン・クロール』もその一つである。この時期の作品は、当時の小説の主たる流通先である貸本読書室向けに書かれた「商業文学」<sup>1</sup>である。さらにバルザックは、一八二九年以降に刊行された作品しか『人間喜劇』に入れておらず、それ以前のは公に自分の著書と認めることはない。それゆえ「青年期の小説」は、これまで多くの研究者からは単に駄作の一団と判断され、現代の一般読者の眼に触れることもなかった。しかし本当に読む価値に乏しい作品なのであろうか。

われわれは、「青年期の小説」には単にバルザックの世界を構成する要素の萌芽が見いだされるのではなく、『人間喜劇』の情景と直結する反響を引き起こす豊かな文章が立ち現れると考える。それは読者の想像力の中に、発見と感動に導く自律した言語世界を構築する運動を起こすに足る力を十分に備えている。その幾つかの具体的な例を、『ヴァン・クロール』のストーリーを時間軸に沿っておいながら、パリにおける空間の検討を中心にしてこの小説の中に探し求めてみよう。

---

<sup>1</sup> Préface au *Vicaire des Ardennes*, Pollet, 1822, T. I, p. xxx.

## 悦楽の館

一八一三年、ナポレオン軍の勇敢な将校オラス・ランドンは、遠征中のスペインでパリにいる親友のアンニバルからの手紙を受け取る。それはランドンの婚約者ヴァン・クロールが裏切っていることを報告するものである。クロールという愛称で呼ばれるこの若いイギリス人はロワイヤル広場とテュレンヌ通りとの角にある家の三階に、叔父のジョージ・ヴァン卿とその娘セシルとともに住んでいる。そのアパルトマンの上にある長らく誰にも使われていなかった屋根裏部屋に何か変わったことが起きたようだ。ヴァンの言動に不審を抱いていたアンニバルは、そこに通ずるドアの合い鍵を手に入れて入り込む。そこで見たものを伝えるのが、一〇月一七日付けの手紙である。

悪魔か、妖精か？いいや、この官能の宮殿の創出をつかさどったのは、あらゆる喜びに包まれた愛だ。一体どんな貴人が気前よく金をまき散らし、新たなるジュピターであるかのように新たなるダナエを守る堅固な壁を乗り越えたのか。どんな魔法を使って俺の警戒怠りない視線から、職人や、豪華な家具、それにこの愛の隠れ家のすさまじい贅沢を隠したのだろう？

このおぞましい屋根裏は三つの広間に区切られていた。頭上の醜い輪郭は絹に覆われて見えなくなっているが、その絹は旋回し、流れ、遠ざかり、色合いを変え、潜み、日の光のごとくカテドラルのアーチの間に再び現れる。俺の足は至る所で贅美を極める絨毯に行き当たった。部屋の隅々にまで掛けられている絵は、その陶然とするような色彩、オシアンOsianの絵画の中で雲の間の星のように現れるものにも似た優雅な肖像を俺の目に差し向けていた。あちらこちらに見事な壺や、彫刻、王侯の持つ磁器が置かれている。さらに至る所に開いたばかりの新鮮な花が飾られていて、視線を魅惑し、感覚を楽しませ、目も、手触りも、匂いも尽きることはない祭りのようだ。だがお前には寝室のことしか話すまい。それこそ享楽の女神が巧みにこの快樂の殿堂を作り出したのだ。窓はすりガラスで、屋根裏の天上はまばゆいばかりのモスリンの反物で覆われ、その端は幅広の青い絹のリボンで留められている。絨毯は白地に、青い花柄が施されている。何もかもがこの繊細な調度と調和している。ベッドは古風な型で、官能的な優雅さの掛布で覆われている。そのベッドは、愛の営みの後に見られるように、乱れていた (B.O., t.3, pp.53-55) <sup>2</sup>。

<sup>2</sup> 筆者の試訳の底本としては、初版 *Wann-Chlore*, Urbain Canel et Delongchamps, 1825 の複製である一九六三年刊の *Les Bibliophiles de l'Originale* を採用した。本文中での出典の表記は、出版社の略号 (B.O) とこの版での巻数と頁数のみを示す。同一頁内で

官能と色彩の快楽が充満する室内と言えよう。頭上から足下に至るまであらゆる所に、絹やモスリン、花や絨毯、絵画や窓ガラス、磁器やベッドが、刺激的であると同時に調和のとれた色と形の音楽を作り出している。

このようなパリの一隅に隠された秘密の愛の部屋となると、われわれはすぐに『人間喜劇』の中で「パリ生活情景」の一編となっている『金色の眼の娘』（一八三五）のヒロインであるパキータの閨房を思い起こす。アンリ・ド・マルセーがこのクレオールクレオールの娘のもとに連れて来られて目にするのは、自分が入ってきた扉には「豪華なつづれ織りの垂れ幕」（創元、第七巻、二九七頁）<sup>3</sup>3がかかり、部屋全体は「赤い壁布」（同上）が張られ、「そのうえをやわらかなひだのあるインドモスリンがおおっていて、まるでコリント風の円柱のようにくぼんだりふくらんだりした丸ひだをつくり、その上と下は黒い唐草模様のついた紅色の帯」（同上）でとめてある。ベッドとして使われる本物の巨大なトルコ長椅子は「白カシミア織りの長椅子で、ひし形模様にちらされた黒と紅の絹のぼら結びを一段と美しく見せて」（同上）いる。敷物には「東洋のショールに似て、いろいろな絵模様がえがかれ」（同上）、柱時計や燭台は「どれも白と金色の大理石」（同上）である。たくさんの「優雅な花台にはあらゆる種類のぼらの花が盛られ、白や赤の花々がいけて」（同上）ある。アンリとパキータが至上の悦楽に浸るのは、このように白と赤と金の色が交錯する空間である。個々の色が愛着と愛情、情熱をそそるものとした上で、作者は全てが「それぞれ無意識の感応のなかでやさしく愛撫されていたのだった。この完全な調和のなかには、色彩の合奏があった。それに対して魂は、茫漠と揺れうごく官能的な想念で呼応していた」（創元、第七巻、二九八頁）と語るのである。

色彩の合奏と官能の照応という点において、『金色の眼の娘』と『ヴァン・クロール』のなかの秘密の館は見事なまでの相似を示している。しかし奔放な愛欲に身も心も任せるのにふさわしいパキータの寝室に対し、アンニバルが語る部屋は、白と青が基調の色で、より繊細さと敬愛の優る空間となっている。クロールも、パキータと同じように、知られれば命に関わる愛の虜になったのであろうか。

#### 街路での出会い

---

の出典の場合は、(Ibid.) と表記する。

<sup>3</sup> この論文中の『金色の眼の娘』の訳は、『バルザック全集7』田辺貞之助・古田幸男訳、東京創元社、一九七四年刊を使用した。本文中での出典の表記は、出版社の略号（創元）とこの版での巻数と頁数のみを示す。同一頁内での出典の場合は、（同上）と表記する。

一八〇七年、理工科学校を卒業した十九歳のオラスは、ナポレオン親衛隊の将校となり、翌年従軍中に自分を助けようとして重傷を負ったアンニバルをパリに連れ戻す。九月末、回復期に入った親友とともに、現在はボーマルシェ大通りという名前になっているサン＝タントワヌ大通りを朝の散歩しているときに、「恐ろしいほどに青白い」(B.O., t.2, p.175)、彫刻のように美しい少女とすれ違う。老人とともに歩むその若い娘には「何かしら魔法のような」(B.O., t.2, p.176) 魅力があり、オラスは彼らの後を追ってサン＝ポール教会に入る。祈りを捧げる少女を柱の陰から盗み見する青年は心地よい虚脱感に捉えられてしまうこの日が、二人にとっての宿命的な恋の始まりとなる。

街路での散策の時に見かけた女性を追い求めるという状況も、『金色の眼の娘』と強い類似性を示す。一八一五年の四月、テュイルリー公園北側の遊歩道を散歩していたアンリは、官能的な素晴らしい肢体と光り輝く黄金の色の眼を持つパキータと出会う。魅惑された青年は、次の日から毎日同じ時刻の同じ場所に戻ってきて、意中の女性の姿を探ることになる。オラスも、出会いの翌日から、サン＝タントワヌ大通りやサン＝ポール教会を巡り歩くことを繰り返すのである。

クローラは正体が不明な保護者とともに現れるが、この老人の容貌は醜悪で、尋常ではないものと映る。少女との対比は強い印象を残すもので、「この醜と美の、老と若の特異な結合に激しく興味を引かれずにいることは」(B.O., t.2, p.177) かなわない。パキータにも醜い魔女のような付き添いの老女中が片時もそばを離れずにいるのである。アンリはパキータの乗った走り去る馬車を追いかけて、住まいがサン＝ラザール通りの邸宅であることを突き止める。オラスは、徒歩で帰宅する老人と少女の後を付けて、彼らがロワイヤル広場とテュレンヌ通りとの角にある家に入るのを確かめるのである。

門番からヴァン老人はイギリス人で、楽譜の写しを書く仕事をしていることを聞き出したオラスは、アンニバルの知恵を借りて、オペラの台本に作曲をしてもらうという口実でヴァン家を訪ねる。出入りを許されたオラスは、この父娘との交流を深め、老人は人気も衰えたイギリスから一財産を稼ごうとフランスにやって来た作曲家であり、クローラは歌劇場の火災で死んだ踊り子の娘であることを知る。六六歳の時にフランスにやってきてから一〇年間、運勢を立て直すことはできなかった。「パリもまた私にとってロンドンと同じように災いをもたらす街だった。人間がひしめき合うところではどこであろうと、数量で得られるものは真情において失われ、さまざまな利害が多ければ多いほど、エゴイズムも大きいという悲しい確信を得た」(B.O., t.2, p.225) だけの結果に終わったのである。『人間喜劇』の中で繰り返し展開されるパリ論の嚆矢が、社会の落伍者の口から表明されるのである。それゆえマレー地区は、「この質素な、貧窮の状態にまで」(Ibid.) 落ちてきた老人が、世に知られず、一種哲学的な諦観を持って実直な生活を送るには最適な場所となる。

オラスとクローラは、直に「互いに会う習慣は心に欠かせぬもの」(B.O., t.2, p.231)となった。清純でありながら、互いに熱愛し、心が一つとなることを感じる時期に入ったのである。この二〇歳の青年と一五歳の少女は永遠の愛を誓って婚約し、ヴァン老人から「この世で一番美しい夫婦」(B.O., t.2, p.242)になるだろうと祝福される。一八〇八年末に軍務に復帰してから、一八一四年初に退役するまでの五年間は、数少ない休暇の時にパリに戻ってくることを除けば、離れ離れのままに続く、清く、輝かしく、激しい恋がもたらす幸福の時代を迎えるのである。

#### 街路から窓へ

街路で生まれたドラマは、街路と室内をつなぐ窓が焦点となって新たな展開を見せる。窓を見張る、窓から覗き込むという場面が、一八三〇年刊の『鞠打つ猫の店』や『二重の家庭』など初期の小説から『人間喜劇』において重要な役割を果たすことは知られている。だが知られざる私生活の悲劇、内面の心理と外部空間の照応が窓を通して様々に語られるのは、「青年期の小説」の中ですでにバルザックが着手していた領域であり、技法なのである。

ドイツの戦線に戻る際、オラスは陸軍大臣付秘書官となったアンニバルにヴァン父娘の世話を頼む。誰よりも早く軍報を知り得るこの婚約者の親友をクローラも自分の貴重な友人として扱う。一八一三年スペインに転戦したオラスにアンニバルは、ヴァン老人の死後、その弟ジョージ・ヴァン卿が娘のセシルとともにクローラの家に住むことになったことを書いてくる。父を失った悲しみと新しい共同生活、その後徐々にクローラに見られる変化が報告される折々の通信の後、オラスがアンニバルから受け取った最後の手紙は日記の形を取っていた。それはクローラに愛人ができたと告げるもので、その確証を得るためにアンニバルが行ったことが綴られていた。その愛人ではないかと思われるのは、イギリスの大臣C卿の息子チャールズであることをパリの町中での馬車による追跡、ナポリ大使邸での舞踏会での談話によって突き止める。

十一月一日の日記では、クローラのアパートマンの上にある屋根裏部屋の窓に何かしら新奇なものが感じられることに気付いたアンニバルは、ロワイヤル広場の北側を走る通りを挟んで反対側の角にある家に目を付けたと記されている。この広場にある建物のアパートマンは同じ高さの位置にそろえられているので、「そこからヴァン・クロールところで何が起きているのかを見るのは容易な」(B.O., t.3, pp.67-68)ことだったのである。「必要な時間はいつまでも隣の家のアパートマンで見張りに立つ」(B.O., t.3, p.68)決意をし、翌日門番を買収してその屋根裏部屋を監視所にする段取りを整える。「望遠鏡を手に、密偵の行いに具合の良い位置に潜んで」(Ibid.)四六時中表を窺い始めるが、深夜の一時にテュレンヌ通りの角に止まった馬車から降りてきたのは、チャールズとクローラだった。笑い、ふざけながら家の中に入っていき、

やがてクローラのアパートマンに明かりがつく。カーテン越しに映る三人の影は、クローラとチャールズ、セシルのものであることは間違いない。その「不吉な影」(B.O., t.3, p.69) がしばらくの間たわむれていた後、明かりが消える。すると暗闇の中で突然「なまめかしい屋根裏部屋の硝子窓」(Ibid.) に次々と明かりがとまり、寝室からはことのほかまばゆい光の照射があふれる出る。そしてまた二人の恋人の戯れる影が部屋から部屋へと揺れ動くのである。その「地獄のような光」(B.O., t.3, p.70) は最後の希望をくだき、心を「焼き尽くすたいまつ」(Ibid.) であった。自分の部屋に戻ったセシルは、幸福な恋人たちの眺めから受けた心のざわめきを鎮めるかのように、窓を開けて星空を見上げていたと言うのである。さらにアンニバルは友に決定的な一撃を伝える。クローラは妊娠しているのが見て取れるし、それも臨月は近そうだと語る。早くフランスに戻って復讐しろという言葉で手紙を終える。

オラスは軍隊を離れ、スペインからフランスへと夢遊病者のように北上する。オルレアンまで出迎えにきていたアンニバルから、クローラは男子を出産し、チャールズは父から結婚の許可を得るためにイギリスへ戻っていると告げられる。新たな打撃を受けて病に伏せ、地獄にいるような苦しみを味わうが、クローラを見るという意思が立ち上がらせる。

パリに着き、期待と不安に胸を締め付けられながら、かつては心躍らせて歩んだ階段を上り、幸せな隠れ家だったアパートマンに入る。驚愕と苦痛にうたれたかのようなクローラは、二年ぶりに会ったばかりなのにすぐに出かけてしまう。彼女を追いかけてパリ郊外のセーヴルにきたオラスとアンニバルは、クローラを運んでいた馬車が止まっている家の向かいにある旅籠の中庭に馬車で乗り入れる。

この場面でもまた窓は、ヒーローが見たいものそれだけを示すことによって、その心のありようを浮き彫りにするのである。オラスは宿屋の二階の部屋に上り、その窓からクローラのいる家を見ると、チャールズがその家に入って行く。狂乱にとらわれたオラスは、窓から壁へ、壁から窓へと機械仕掛けのような移動を繰り返す。恋敵が家のドアを開けたまま心配そうに外へ駆けだしたのを見て、オラスは窓から中庭に飛び降り、そのまま向かいの家の中に走り込む。階段の上から幼児の泣き声とクローラの優しい声が聞こえてくる。二階に上がり、半開きになった部屋のドアから覗くと、クローラがあやしながら子供に微笑みかけているのが見える。その美しい姿は、「神々しく、崇高」(B.O., t.3, p.109) でさえあった。彼女は「罪があるか」(Ibid.) と自らに問い、心は「ない」(Ibid.) と答えるのだった。家を飛び出したオラスをアンニバルが馬車に乗せようとしているときに、チャールズが戻ってくる。オラスは恋敵に「彼女を愛してやってくれ」(B.O., t.3, p.110) と言って逃げ去る。

パリに戻ったオラスはアンニバルに、もう二度と会うことはないだろう、偶然が導くところでひっそりと暮らすことにする、彼女が幸せになることを祈る、と最後の別

れを告げる。愛馬を駆ってパリを全速力で抜け出したのは、一八一四年一月一五日のことである。

### 愛がもたらす死

飛ぶように走ってきた馬が倒れたのは、パリの北六十キロあまりに位置する、美しい田園地帯の一角にある小村シャンブリーを通り抜けようとしていたときだった。オラスは落馬した場所の前にあった貸家を借りて、沈黙と追憶の中で人生の残りを過ごそうと決める。しかしこの地に住む零落した貴族の娘ウジェニー・ダルヌーズと知り合い、ヴァン老人が「善良で、立派な、高潔な」(B.O., t.3, p.25) 人間であると認めていたオラスは、ウジェニーの不幸を救うために一〇月一二日結婚式をあげる。ランドン＝タクシス公爵夫妻はすぐにブルゴーニュの領地へ出向き、パリの邸宅に住み始めるのは翌年になってからのことである。幸福な新婚生活の後に、ウジェニーはパリの「ひどく陰鬱な家並みの間を馬車で通るときに、不幸の予感」(B.O., t.3, p.190) を思わず覚えてしまう。

一八一五年八月のある夕べ、散策に出たオラスとウジェニーは偶然にサン＝タントワヌ大通りに来てしまう。オラスがクローラとの出会いの場の「記念碑となっていた木」(B.O., t.3, p.211) のところに来ると、不気味な光に燃える眼をした恐ろしい影が現れる。その死神のような男はアンニバルだった。オラスに、手紙を一通渡し、後ほど屋敷に来ると言って去る。

館の居室で妻から離れた場所に席を取ってオラスが読んだ手紙は、衝撃の真実を明らかにするものだった。アンニバルは、オラスとクローラの恋が始まったときからすでに親友の恋人に熱情を抱き、猛烈な嫉妬に身を焦がしていたのだ。クローラとセシルの会話を「カーテンの襞の後ろに隠れて」(B.O., t.3, p.226) 盗み聞き、セシルがチャールズの子を産もうとしていることを知ったアンニバルは、これを利用してオラスにクローラがチャールズの恋人になったと思いこませようと計画した。オラスが受け取った、ヴァン老人の死後のクローラからの手紙は、全てアンニバルが筆跡を真似て書いた偽の手紙だったのである。全ては思い通りに動き、オラスはクローラのもとを去る。その後の一五ヶ月間、「誠実な友情という外見の下に自分の常軌を逸した情熱を隠し」(B.O., t.3, p.219) て、トゥールに引きこもったクローラを慰めようとしたのだが、断固とした拒絶が返ってくるだけだったと言う。激怒に駆られたオラスがこの手紙を暖炉の火に投げ込んだとき、アンニバルが館の中の友にあてられていた部屋に着いたことが知らされる。希望のない愛に憔悴したアンニバルは、命を絶とうと毒を飲んでいく。クローラの本当の手紙を渡し、彼女は今トゥールの聖ガシアン大聖堂の裏手にある大司教座保有の館に住んでおり、変わらぬ愛と希望を胸にオラスを待っていることを告げて、息絶える。



オラスは直ちにトゥールに向かう決意をして、支度をすべく寝室に戻ろうと中庭を横切る。その姿をウージェニーは認めるが、彼女はずっと窓に立っていたのだ。一人で旅に出なければならぬと言う夫に、ウージェニーは窓を開け、素晴らしい夜空に浮かぶ月を示しながら、愛の誓いをさせる。シャンブリーにおける窓は愛の予感と幸福への期待をもたらすものであったが、パリの窓は喪失と不幸のおそれを運ぶものとなる。

ウージェニーは窓に釘付けになり、夫が中庭に出てくるのを待ち、その足音を聞いた。[...] 彼女は夫を目で追い、門を開ける音を聞いた。それから門が閉められたとき、彼女はオラスが深遠に落ちるのを見たように思った。彼女においてはすべてが直感であった。さもなければおそらく、よく知り合い、愛し合っているものの間には、説明するには未だ十分に観察がされていない未知の、精神的現象があるのであろう (B.O., t.3, p.251)。

ウージェニーの予感は的中することになる。誰よりも幸福に値するこの「これほどまでに純粹で、広い愛の心をもった三人」(B.O., t.4, p.210) は数々の苦悩が襲いかかる状況に追い込まれ、ついにクローラは病弱の果てに昇天する。最愛のものを失ったオラスもその場で息絶える。友となっていたクローラと人生の希望であった夫が、手を携えて天上の楽園に向かうのを見守るウージェニーには一人残されたものの運命が待っている。一八一六年五月のことだった。

パリでオラスとクローラの恋が始まり、シャンブリーでオラスとウージェニーが結ばれ、トゥールで三人の愛が悲劇の終局を迎える物語を、パリの場面の一部の情景のみから紹介した。時の流れとは無縁であるような静寂なマレー地区、そこの誰もが知ってはいるがついぞ足を踏み入れることのないロワイヤル広場、茫漠として何が起きても不思議ではない、神秘の土地でもある場所を、『ヴァン・クロール』の舞台に設定したのは全く適切な選択である。場所の名前が想起する状況と登場人物たちの運命が、照応してドラマを作り出している。

この小説は、出来事の展開、人物の造型、場面の転換、心理の正確さ、描写の表現性など、フィクションを読ませる力となるものが十分に集結しているテキストである。「青年期の小説」と言われるものは、GFフラマリオン文庫に収められている一八二四年作の『アネットと罪人』を除けば、これまで愛書家クラブ向けの限定流布版でしか読むことができなかった。しかし一九九九年の生誕二百年を記念して、ロベール・ラフォン社がその廉価な文庫<ブカン>にバルザックの初期小説集をおさめた。日本でも、『百才の人』や『アネットと罪人』をはじめとする数点の作品の翻訳が、二千年

に水声社から出版される。『人間喜劇』の作者の手になるものであることをいったん忘れて読むなら、物語自体のおもしろさを楽しめる作品である。

その上で、バルザック研究の立場で読み返してみると、「青年期の小説」は認識を新たにさせる事例に満ちており、興味が尽きることはない。小説における描写において、バルザックの文は欠かせぬ座標軸となっている。その描写を必然とするもの、都市から室内に至るまで、あらゆるレベルにおける空間にたいする問題体系は、『ヴァン・クロール』から理論的に意識され始めるのである。クローラがオラスとトゥールで再会してから起こることを語る前に、作者が大聖堂と周囲の場所の細密な提示をするのは、「景観は、人間と同じように、性格を持つてはいまいか」(B.O., t.4, p.1)、心と事物との間には「秘かな調和」(Ibid.)があるのではと考えられるからなのである。さらに『ヴァン・クロール』に限ってみても、捨てられた女や嫉妬、自殺、内的人間というテーマ、アンドロギュヌスや敵意ある母親、忠実な下僕という人間像、恋愛や友情、社会と人間についての思想、自然と感情の交感や天使と娼婦の一体という状況、あるいは貴族と成り上がりものの違い、透視力などの超能力の問題というように、『人間喜劇』の中で繰り返し取り上げられる題材がめじろおしに並ぶ。「青年期の小説」とは、バルザックが創造した言語宇宙である『人間喜劇』のまさしく小宇宙ではないであろうか。

(1999年6月執筆)